

ローマにおけるユダヤ人幼児院改革

— 公教育省事務官ラヴァの手紙から —

Jewish Infant Nursery Reform in Rome:
Examination for Letters of Ravà, Secretary of the Ministry of Public Education

オムリ 慶 子 *

Abstract

By analyzing letters from Ravà, the Secretary of the Ministry of Public Education, this study clarifies the circumstances surrounding Jewish nurseries (Asili Israelitici) in Rome from 1881 to 1885. The methodology examines letters sent by Ravà to Adolfo Pick, who launched Italy's first kindergarten.

These materials are stored in the Manuscripts and Rarities Section of the Vincenzo Joppi Civic Library (Sezione Manoscritti e rari, Biblioteca Civica Vincenzo Joppi) in Udine, Italy.

This study obtained the following results: 1) Ravà and Pick opposed each other. 2) Ravà instructed Pick on childcare reform. 3) Jewish nurseries reform was progressing gradually in Rome.

キーワード：ヴィットーレ・ラヴァ、ローマのユダヤ人、ユダヤ人幼児院改革

はじめに

2020年度の研究「イタリアのユダヤ人コミュニティにおける初期幼稚園 — アドルフォ・ピックとヴィットーレ・ラヴァー」¹⁾では、ヴィットーレ・ラヴァ (Ravà, Vittore 生没年不詳、以下ラヴァと記す) がアドルフ・ピック (Pick, Adolfo 1829-1894、以下ピックと記す) に宛てた1870年代の手紙 (11通) に迫った。当時はまだイタリア統一前から続いていた、アポルティ神父 (Aporti, Ferrante 1791-1858)²⁾ がウィルダースピン (Wilderspin, S. 1792-1866) の教育から構想を得た幼児院 (asilo infantile) がイタリアの幼児のための保育施設であった。本論文で扱うのは、ラヴァがイタリア半島でまだ少なかった幼稚園 (Giardino Infantile) をポーニャで実現するために、ヴェネツィアですでに2件の幼稚園を開園していたピックに支援を求めた手紙から始まる。ピックはユダヤ系ポヘミア人で、1869年11月3日ヴェネツィアでイタリア最初の幼稚園「聖使徒幼稚園」(Il Giardino S.S. Apostoli) の設立にかかわっており、また1871年2月12日には自らの幼稚園「ヴィットリーノ・ダ・

フェルトレ幼稚園」(Il Giardino Vittorino da Feltre) を立ち上げており、ピックはイタリア幼児教育史上著名な人物である。

2020年度の研究では1870年代を対象にしたが、その理由として、ラヴァとピックとの手紙のやり取りが1872年から始まること、そして1800年代の教育は実証主義 (Psitivismo) 哲学の影響を受け、フレーベル・メソッドも実証主義的解釈を受けるようになったため、純粋なフレーベル幼稚園の開設を目的としていた1870年代に絞った。

今回取り扱うラヴァの手紙は、1873年秋に公教育省事務官のポストを得たラヴァが、ローマで少しずつ人脈を広げていく1880年代前半を扱う。その内訳は葉書が7通、手紙が8通である。これらの手紙や葉書は、イタリア北部のウーディネ (Udine) のヴィンチェンツォ・ヨッピ市立図書館 (Biblioteca Civica "Vincenzo Joppi") の「手稿と貴重本セクション」(Sezione Manoscritti e rari. 以下「古文書館」と記す) に保存されているピック宛の手紙類である。

まず1880年代前半のラヴァの手紙を分析する前に、1870年代のラヴァがピックに宛てた手紙の内容

* Keiko OMRI 教育学部教授

を2020年度の研究を土台に振り返ってみる。なおラヴァの手紙で、完全に文字の判読ができない場合はXXXで示し(判読不明)と示す。また判読不明でも内容から予想できる場合と、ラヴァとピックの間に共通の合意があり文章の流れが飛躍し理解しにくい場合でも予想できる場合は、予想される言葉をカッコ内で示す。また、人物名が多く出てくるが、苗字だけが書かれておりどのような人物かわからない場合が少なからずあるが、そのまま苗字だけを掲載する。

1870年代のラヴァの手紙(ラヴァからピックへ)³⁾

ピック宛の最初の手紙は1872年12月19日、ボローニャからヴェネツィア在住のピックに送っている。1871年2月にヴットリーノ・ダ・フェルトレ幼稚園をリアルト橋近くで開園したピックに、ラヴァは「名声しか存じあげていないあなた様に、個人的にお願いを申し上げるのは甚だ厚かましいことと存じますが、」と丁寧な挨拶をしている。幼稚園の名称であるヴットリーノ・ダ・フェルトレは、ヴェネツィア生まれでルネサンス期の著名なヒューマニストであったため、ピックはこの名前を使用したであろう。そして、ラヴァはボローニャ初の幼稚園開設を考えていたが、すでに教育連盟(Lega d'Istruzione)が市の許可を得て幼稚園を開設しようとしていることがわかったため、焦った様子でピックに協力を呼び掛けており、園長候補の依頼や、ピックの幼稚園のプログラムや保育料、設備投資について、そして園長やアシスタント、用務員の給与はどのくらいかを尋ねている。また宗教教育についても尋ねている。当時のイタリアは国の命を受けてカトリック神父が教育にかかわったり視学官になることが多かったが、ピックもラヴァもユダヤ人であったため、カトリック教育を幼稚園に押し付けられるのではないかとの懸念を持っていたと考えられる。

ラヴァの考えによると、幼稚園の対象は今までの教育施設のように貧困層の子どものためだけではないこと、私立であること、幼稚園の母体となる協会は相互共済の精神を持っていることであると言っている。ヴェネツィアで開園した2つの幼稚園はどちらもユダヤ人による私立の幼稚園であり、そこで宗教教育がどのように行われているのかが、控えめに言ってもそれが一番聞きたかったところであろうと

思われる。

2通目の1873年6月19日付の手紙では、教育連盟と話がうまく行ったようで、ラヴァは幼稚園設立に深く関わることになった。そして保育者候補の二人をピックの幼稚園で実習をさせてほしいと依頼して、ミナレリ(Minarelli)という名字の姉妹はヴェネツィアのピックの幼稚園で実習をすることになった。

1873年10月4日の手紙のレターヘッドには「アレッサンドロ・マンゾーニ幼稚園」(Giardino Infantile Alessandro Manzoni)と書かれている。アレッサンドロ・マンゾーニは19世紀の著名な文筆家で、イタリア語の基礎となったフィレンツェ語で書かれた『神曲』(Divina Commedia)のダンテとともに、標準イタリア語を完成させた人物として彼の『いいなづけ』(Promessi Sposi)はイタリアの学校では必須の暗誦教材となっている。

まだこの時期は、先述したアポルティが考案したメソッドとフレーベル・メソッドをミックスさせた「混合メソッド」(metodo misto)を、デ・カストロ(De Castro, Vincenzo 1808-1886)⁴⁾が考案しており、これはアポルティ・メソッドの言語教育を軸にした教育法で、デ・カストロは言語教育を中心とした『新しいアポルティ』(Il Nuovo Aporti, 1876)⁵⁾を出版している。この時期の幼児教育に言語教育が取り入れられた背景には、統一(1861)までのイタリアは小国家の集まりであり、それぞれの国の言語で話していた人々に、標準イタリア語を身に着けさせるという国家的目標があったためである。

この時期の養成校は古いアポルティ・メソッドが中心となっており、フレーベル・メソッドを学ばせるために、アレッサンドロ・マンゾーニ幼稚園(おそらく園長)候補ピオルティ・グアルディ(Piolti Gualdi)の実習をピックに依頼している。彼女は複数の幼児院の証明書を持っており実践面は保証されているが、古いタイプの保育の証明書であるため、フレーベル・メソッドを取り入れているピックの幼稚園での実習を依頼したのである。

1873年11月29日のローマからの手紙では、ラヴァが公教育省事務官のポストに合格したことをピックに報告している。そのため、保育者となるミナレリ姉妹は自分(ラヴァ)の兄(弟)に委ねてきたこと、そして前回の手紙で、ピックの幼稚園で実習させてやってほしいと綴っていたピオルティ・グアル

ディ夫人をピックの幼稚園の園長に推薦している。この手紙には、ラヴァがボローニャを後にするため、残した保育者たちの今後をどうするかを考えながらも、新しい職場への期待が書かれている。たとえばラヴァは、自分がフレーベル・メソッドの使徒として働くことを宣言している。そしてローマにはまだフレーベル幼稚園がないことを述べている。ローマが首都になったのは1871年であり、長らくハプスブルク家の支配下にあった北イタリアとくらべて、当時のローマはフレーベル・メソッドの影響を受けることはほとんどなかったと考えられる。そのため12月10日の手紙では、ラヴァはユダヤ人幼児院から改革を始めるのがやりやすいのではないかと思いついている。理由としてユダヤ人幼児院 (Asili Israelitici) はかなりひどい状態なため、ユダヤ人たちは保育内容の改革に反対をすることもないだろうし、フレーベルの名前すら知らないのではないかという思いつきからである。

しかしこの手紙から1年超経った1875年1月21日の手紙では、まだユダヤ人幼児院改革を始めるには至っていない。前回の手紙には、ユダヤ人幼児院はかなりひどい状態のため、簡単にフレーベル・メソッドに代えられるだろうと踏んでいたが実際は難しかったのだろう。ラヴァは、ユダヤ人幼児院をすぐにフレーベル・メソッドに代えることなく、段階的に改革していくためのメソッドとして、アボルティ・メソッドとフレーベル・メソッドとの「混合メソッド」を選んだのである。この時のユダヤ人幼児院では、子どもたちの遊びや仕事 (折り紙などの手作業のことと思われる) も行われていなかったという。

またラヴァは1876年5月8日の手紙で、自分が混合メソッドの旗手であるデ・カストロの新しい図書『マニュアル』(Il Manuale) について新聞に書評を書き、ユダヤ人幼児院では混合メソッドを導入しながらも、徐々にフレーベル・メソッドに変えていこうとする作戦について綴っている。そしてラヴァは、ボローニャの師範学校を出た優秀なエウジェニア・ソラーニ (Eugenia Sorani) の実習をピックに依頼しており、実習期間の彼女の (優秀な) 様子を公表することによって、ユダヤ人幼児院から引っぱりだこになり、ユダヤ人幼児院の改革を続けていくことができるだろうと語っている。そしてその結果、ユダヤ人幼児院をようやくフレーベル幼稚園に

することができるだろうと綴っている。

しかしまだ公教育省内に強力なフレーベル反対派がいること、そして「正義が来る日まで、私たちは前進しましょう。」と結んでいる。

1881年

ラヴァがビエツラ (Biella) という町から、8月20日付⁶⁾で「親愛なるピック教授」で始まるピックに宛てた手紙には、「私の字は本当に最悪だ」と下線を入れて強調し、そのあとに、サルヴォーニ (Salvoni) 教授と同じように、自分が国の中央視学官になったのは信じられないと書いている。こうなったのは、大臣ボゼリ (Boselli) の妻でありラヴァの生徒でもあったエウジェニア・ソラーニにメダルが与えられたからだろうと推測している。つまり大臣が、その妻を引き立ててくれたラヴァへの感謝として、ラヴァを国の中央視学官に抜擢したと考えているようである。そしてラヴァは (おそらく公教育省の) 命令を受けた学会の時期なのでミラノに來ているが、確かなことはまだ言えないと思わせぶりな様子である。

そして、雑誌『時代』(il tempo) を続けて送ってほしいと頼んでいる。1873年10月4日付の手紙でも『時代』の話が出てきているが、ピックに『時代』を送るよう依頼しているということは、ピックが発行している雑誌なのか、判読不明なセンテンスが多い中に1880年代にイタリアで流行った「実証主義」教育者として著名なシチリアーニ (Siciliani, Pietro 1835-1885)⁷⁾ の名前が出てきているため、シチリアーニも『時代』にかかわっていたのかもしれない。フレーベル・メソッドに実証主義的な解釈が入ってきた瞬間である。実証主義とは、物事や人間の行為、そして事実 (i fatti) を実証する (科学する) 哲学であり、フレーベルの思想を科学的なもの捉え、フレーベルの作業や遊びである「為すこと」(il fare) を実証主義的立場からとらえる教育学者が現れはじめたのである⁸⁾。

11月24日付⁹⁾でラヴァはピックに葉書を送っており、そこには、「親愛なるピック教授」(Caro Prof. Pick) で始まり、「委員会設置を喜んで引き受けます。」と書かれている。そして時間ができ次第、仲間と相談し委員会を立ち上げると続けている。またフレーベル100年祭 (フレーベル生誕100年祭と思われる) がいつ行われるのか教えてほしいこと、そし

て記念式典としてローマでも行うことができるというアピールで結んでいる。

1882年

3月6日付¹⁰⁾の手紙の上部には、番号が71から始まり名前と役職が書かれたリストがあるが、76で終わっている。そして「続くだろう」(continuerà)という文字があり途切れている。おそらくフレーベル祭に招待する人のリストなのかもしれないが、古文書館ではこの断片しか見つからなかった。

その下に「親愛なるピック教授」とあり、デ・XXXX(おそらくデ・ドミニチス De Dominicis, Saverio 1846-1930)¹¹⁾がペチーレ(Pecile)議員に手紙を書いたように、委員会はヴェネツィア中央議会から発布はするつもりがないと書かれている。ヴェネツィア中央議会の発布は何を指しているのかは文章の前後からは読み取れない。デ・ドミニチスは、フレーベル・メソッドを実証主義的に解釈した実証主義教育者の一人であり、1880年代になるとフレーベル・メソッドは実証主義的解釈が行われ、少しずつであるが本来のドイツ・ロマンティック哲学の影響を受けたフレーベル・メソッドの思想から離れていくようになった。そして4月21日のフレーベル祭(前述のフレーベル100年祭のこと)は行う予定であり、大臣はコッレージオ・ロマーノ(現在のローマ大学)のホール(Sala da Collegio Romano)を使用する許可をしてくれており、必要な備品を考えてくれていると綴っている。そしてラヴァは、自分はドイツ語ができないので、イタリア語で書かれたフレーベル伝記の出版物をできるだけ早く教えてほしいと書いている。そしてデ・XXXX(ドミニチス)が、ローマに(幼児)院(asilo としか書かれていないが古いタイプの幼児院か?)を設立するつもりだったようだとして綴っている。ラヴァは他の教育(おそらく幼稚園)に期待をかけているようだが、レージョ・エミリアにXXXXXXX(解読不明)したフレンツェのXXXXXXXXXXXX(解読不明)をあなたに送ると続けている。解読不明な部分が多く確かなことはわからないが、レージョ・エミリアかフィレンツェにフレーベル幼稚園を設立することの希望を語っているのではないかと考えられる。

話は変わりラヴァはピックに、ピックが出版した『現代教育』(Educazione Moderna)¹²⁾の冊子をジョヴァンニ・グイデッティ(Guidetti, Giovanni)教授

に送るようと言っている。そしてユダヤ人幼児院XXXX(のための)冊子(『現代教育』のこと)の購読料6リラを替をXXXXX(送る)とピックに伝えている。

ピック宛の3月18日付¹³⁾の葉書には、フレーベル祭の準備について書かれている。葉書には「親愛なるピック教授」(Caro prof. Pik)の後、いきなり招待する3人の名前が書かれ、来週に入ったら資金集めを終えないといけないこと、それはレージョ・エミリアの13リラより高く129リラになるだろうこと、最後に4月21日は素晴らしい祭りになることに期待していると書かれている。

3月20日¹⁴⁾の葉書には、「親愛なるピック教授」と書かれているが、不思議な内容になっている。時が来たらメンバーに加わってほしいと書いており、公教育省図書館司書ロスターニョ(Rostagno)とブルスコリ(Bruscoli)の言葉がある。そして子ども祭が4月21日にコッレージオ・ロマーノで行う知らせについてバッチェッリ(Baccelli, Guido 1830-1916)¹⁵⁾大臣の名前が書かれている。バッチェッリは、著名な医師であるとともに教育大臣である。最後にラヴァのサインがあるが、ラヴァはどのようなつもりで自分が属している教育省の人たちのメッセージをピックに送ったのだろうか。

日付不明¹⁶⁾の葉書は古文書館で閲覧した時に、上記の3月20日が4月8日付手紙の間に挟まれていたため、ここで扱う。なお、この手紙は葉書に押印された郵便局の印から1882年であることは間違いない。

ローマ議会はうまくいったという言葉で始まり、ラヴァを含めた議会のメンバーが紹介されている。そして幼児の夕べの集いによって地元の記念式典が行われるだろうこと、火曜日の集会後には、記念式典の詳細と初めての会員名簿を送るので、署名を集めるのにどのくらい時間が必要かを聞いている。最後にはユダヤ人幼児院の数を数えると言っているが、おそらくユダヤ人幼児院も記念式典に招待しようとしているのではないかと思われる。

4月8日¹⁷⁾の手紙では、1876年以来、久しぶりに「教育省」(MINISTERO DELL'ISTRUZIONE)の印がある便箋を使用している。集めた寄付は預かったままかなりの日がたっしまい、即座に支払うべきであるが、時間がないのでまだ送ることができていないと書いている。おそらく3月18日の葉書に書

かれていた129リラのことではないかと思われる。そして受け取ったローマの加入者リストには多くの間違いがあったので、訂正したコピーを送っている。

その後ラヴァは、フレーベルのリトグラフか写真の肖像画があるかどうか、値段はいくらかを聞いており、その目的は書かれていないが、フレーベル祭の時にどこかに掲げるつもりなのだろう。そしてピックが出版した『現代教育』を政府にXXXX（判読不明。おそらく献上？）し、彼らが耳を傾けてくれたことは私にとってうれしいと語っている。その後の判読は困難であるが、しかしながら学校教育当局との話はうまくいくのかどうかの懸念があるようだ。ラヴァは、あなた（ピック）のことを大切に思っているから、危険な目に合わないよう慎重であるようにと注意を促している。

最後に、ローマにあるフレーベル・システムの幼児教育機関（複数形）のリストと、登園している園児の数をピックに送るという話で終わっている。ラヴァがローマに赴任した1873年には、まだフレーベル・システムを導入している幼児教育施設はなかったが、1882年にはすでに複数のフレーベル・システムの幼児教育機関が存在しているということがわかる。ラヴァはユダヤ人幼児院を「混合メソッド」の導入から始め、少しずつフレーベル・メソッドのみの幼稚園にしていく計画を立てていたが、ユダヤ人幼児院であれば自分と同じくユダヤ人であるピックにははっきりとそのことを言うだろう。したがっておそらくユダヤ人幼稚園ではなく、イタリア人の子どもたちが通う幼稚園であると考えられる。そうなると、イタリア人の子どもが集まる幼児院には、フレーベル・メソッドを導入しやすかったのかもしれない。しかし、1873年から1882年に至るピックとの手紙のやり取りではその詳細については語られていない。

5月11日¹⁸⁾の手紙も、教育省の便箋を使用している。その最初に、ピックからハガキを受け取ったこと、そしてデ・ドミニチスの論文が掲載されている雑誌『新しい教師』(Nuovo Educator)をピックに送ると書いている。

手紙には、ラヴァが講演で話をした内容のコピーを受け取ったかをピックに尋ねている。そして祭（おそらくフレーベル祭のこと）はどうだったかと簡単に訪ねており、すぐ別の話に移っているため、

祭りのことはとりあえずうまくいったのかどうかを聞いているだけのようである。

その後ラヴァはピックに、ミラーノから送った『幼児』(Infanzia)の雑誌を受け取ったのか、もしまだならフレーベル・メソッドに関するユダヤ人幼児院(asili)の子どもたちのエピソード記録のコピーを送ると書いている。前述の日付不明の葉書にあるように、ラヴァはユダヤ人幼児院とのつながりを持ち、そこでの保育改革を始めていることがわかる。

その後、「まじめな話に移りましょう」と書かれており、ピックに仕事の紹介をしている。つまり師範学校教師の紹介である。ピックはペルージャ(Perugia)から師範学校(Scuola Normale)のあるボローニャやトレヴィーゾ(Treviso)の技術学校に移りたいと願っているようだが、ラヴァは、ボローニャやトレヴィーゾに移るのは無理で、クレモーナ(Cremona)かパヴィア(Pavia)であれば移動は可能であることと、どちらも師範学校があると書いている。ピックがペルージャを拒否しているのは、本来の理由は手紙に書かれていないが、距離的なことも理由の一つとしてあるのではないかと思われる。ペルージャはボローニャやトレヴィーゾと違い遠方である上に、町は小高い山の上にあるため、この時代であればかなりの時間的ロスがあると考えられる。そしてラヴァは、クレモーナよりパヴィアの方が良いこと、なぜならクレモーナはXXXX(判読不明)の要塞だからと書かれているが、おそらく判読不明なところには「アポルティ・メソッド」という語が入るのではないかと考える。なぜならラヴァの次に続く文章には、パヴィアは以前からフレーベル・メソッドを取り入れており、デ・ドミニチスやベルトラミ(Beltrami)¹⁹⁾の支援があるからだと言っている。現在でもクレモーナにはアポルティ神父の足跡が残っている。アポルティの名前を冠した保育所、幼稚園、学校は現在も残っており、そして教会に続く通りの名称は「フェッランテ・アポルティ通り」(Via Ferrante Aporti)であり、クレモーナ大聖堂の外の回廊にはアポルティの(小さくはあるが)記念碑が掲げられ、当時はアポルティ・メソッドの牙城だったということは大いに考えられるであろう。

ラヴァは、師範学校の希望に関して早く返事が欲しいこと、そしてこの話については絶対に秘密にしてほしいことを言っている。この時代でも、公教育

省事務官であるラヴァが、特定の人物との付度は許されていないのであろうか。

ラヴァは最後に、ユダヤ人の優秀な保育者の紹介をしている。彼女はポーランドで3年間見習いをした若くて優秀な学生のようなものであるが、ユダヤ人であるため問題にならないよう気を付けてほしいと言っている。確かにユダヤ人であるということを表明するのがタブー視されていたことは、その片鱗を予想することができるが、フレーベル・メソッドを学び保育者となった女性の中にユダヤ系人物がいたことが、この時代においてどのくらい隠さなければならなかったことなのかは当時のローマにおいては想像することができない。ヴェネツィアで最初の公立幼稚園を開いたロシア系ユダヤ人のエレーナ・ラファロヴィッチ・コンパレッティ (Comparetti, Elena Raffalovich 1842-1918)²⁰⁾ は、婚家である窮屈なピサ (Pisa) を飛び出し、ヴェネツィアのピックを頼ったが、ヴェネツィアは古くからユダヤ人コミュニティがあり、ゲットー (鑄造所という意味を持っていた) はユダヤ人にとって安住の地であったようである。しかしこの時期のローマは、ユダヤ人排斥するような雰囲気があったのだろう。

12月21日²¹⁾。半年以上間が空いた手紙である。また内容は前回の3月11日付の内容と脈略が合う部分が全くないので、書かれた内容が理解しにくい。「親愛なるピック教授」の後に「あなたはとても正しいです。」という文言から手紙は始まっている。そして、私たちに敬意を払ってくれる役人のニシオ (Nisio) は、XXXX であるべきではないと私に繰り返し言ったと書かれているが、どうあるべきことがニシオを心配させているのかが読み取ることができず、またその後も、重要なキーワードとなるフレーズや単語が、ニシオを心配させている原因が何かかわからない。そのページの最後に幼稚園 (Giardino d'infanzia) の教師を見つけることについて書かれており、2枚目には、「もう少し我慢してください」とピックに語りかけており、ニシオ関係のいざこざか、幼稚園教師の確保についてなのか、詳細は読み取ることができないが、ピックが思った通りに進んでいないことについて不満を持った手紙をラヴァに突き付けたようにも感じる。

この手紙の終わりの方には、ピックが書いた小冊子にとっても喜んでいことが書かれている。しかしその後、アゴスティーノ・ヴァッジャイ

(Agostino Vaggiai) の物語「ベルサリエーレ (歩兵隊の名前) のソファ」(Il Divano del Bersagliere) はまだ未公開でピックに送ることができないため、ピックがアゴスティーノに直接手紙を書いて許可が出たら、ラヴァからピックに叙事詩と叙述、そして歌詞を送ると言っている。最後に、ラヴァとその妻からのピックへのあいさつとともに、新年が幸せであるようにと結んでいる。

1883年

1883年の手紙は教育省の便箋を使用し9月12日²²⁾ から始まるが、1882年の12月21日の手紙から9か月も間があいている。しかもピックに送られた手紙は簡単な短い手紙であった。今までと同様「親愛なるピック教授」とあり、購読していた『現代教育』は、ユダヤ人幼児院 (Asili infantili israelitici) の名前で購読するということが、そして女性教師のための教育論争を『現代教育』で取り扱ってほしいと綴っている。以前の1882年3月6日付の手紙には、ユダヤ人幼児院のための『現代教育』購読料と書かれていたが、当時はまだユダヤ人幼児院の名前では購読していなかったのかもしれない。また、ユダヤ人幼児院の名称が Asili infantili israelitici となっており「子どもたちの」(infantili) と書かれていることが新しい。しかし名称が本当にこの時期に変更されたのか、単にラヴァの思い付きで書いているのかは知る余地はない。なお、Asili israelitici は本来であればユダヤ人施設というニュアンスの訳になるが、便宜上「幼児」を入れて「ユダヤ人幼児院」で統一した。

話は元に戻り、ラヴァが「女性教師のための教育論争を『現代教育』で取り扱ってほしい」とピックに頼んでいることについて、それがさまざまな改革の中心点となるから、と言っている。簡単な手紙ではあるが、ラヴァの目的であるアポルティ・メソッドとフレーベル・メソッドをミックスしたユダヤ人幼児院を、徐々にフレーベル・メソッドだけにしていこうとする改革がまだ中途であることが、この手紙から、そしてまだ依然、保育施設が「幼児院」であることからうかがえる。

10月4日付²³⁾手紙のレターヘッドには、「地方学校協議会 ヴェネツィア地方の王立教育委員会」と書かれている。ラヴァはヴェネツィアの教育委員会からヴェネツィアに住んでいるピックあてに手紙を出していることになる。内容はピックへのドイツ語

関係の依頼である。ヴェネツィアでドイツ語教授になるための試験があるらしく、その試験委員をピックにお願いしたいということである。明朝9時にお願いしたいということと、引き受けてくれるならすぐ返事が欲しいという言葉で終わっている。最後にラヴァの名前の上に王立教育委員会会長 (Il R. Provveditore) という肩書になっているが、ドイツ語試験のために中央 (ローマ) からヴェネツィア教育委員会に派遣され監督を務めているのではないかと思われる。

1884年

2月13日付²⁴⁾の葉書では、「尊敬する友よ」(Amico Preg. mo) で始まり、賛辞を受けた小論説とともに『オピニオン』(Opinione)²⁵⁾の写しを5枚君に送りますと書いている。おそらく日刊紙『オピニオン』にラヴァの小論説が掲載され評価が高かったのだろう。

続いて役員Nに挨拶を送りXXXXXXXXとあるが、判読不明なところが多くあり全体的に何について書かれているのかは不明である。Nはおそらく1882年12月21日付の手紙に出てきたニシオのことと思われる。次にラヴァが翻訳した「マニュアル・ディロン」(Il manuale Dilon)はこの15~20日のあいだに印刷されること、そして所々の判読不明が続き「3.50リラ」だけが読み取れる。おそらくこのマニュアル本は、3.50リラで売られることが書かれているのだろう。ラヴァが翻訳したマニュアル本は、フランス語だったのではないかと思われる。当時のイタリアは、フレーベルの著作はフランス語に訳されており(イタリア語版は1888年まで待たなければならなかった)²⁶⁾、ヴェローナからフレーベル教育を広めた神父コロミアッティは、フランス語版でフレーベルの著作を読んでいたため²⁷⁾、フランス語はイタリア人にとって比較的わかりやすい言語であったのだろう。

4月25日付²⁸⁾の教育省の印がある手紙では、「私の親愛なるピック教授」(Mio caro prof. Pick)とあるが、手紙の最初の部分では、ラヴァは仕事が忙しくてピックに手紙を長い間返信できなかったことについて、ピックから届いた手紙の日付からラヴァを非難しているのではないかと疑っている。おそらくピックは日付をかなり前の日付にするなど、ラヴァにとっては嫌味のように読み取ったのであろう。

「何を望んでいるのか？」とただならない雰囲気漂う手紙である。そしてラヴァは、自分の仕事である教育相の仕事がどんなに忙しいのかを綴っている。「その上」と続いて、「マニュアル・ディロン」の翻訳の下書きに手を加えないといけないと綴っている。この「マニュアル・ディロン」は、2月13日付の手紙に出てきており、ラヴァのいら立ちが見える。しかし、試し刷りが印刷屋から出てきており、見本をあなたに送るよう手配するが、『現代教育』について長々と話をしないようにと注意を呼び掛けている。なぜここで、『現代教育』について話が長くならないようにとピックに要求しているのか、この文面からはその意図が分からないが次の文章に、命名法(nomenclatura)のXXXX、XXXX(解読不明)を追加した補足に、修正を入れてほしいと書いているが、命名法をどのようにしようとしているのか判読できない。そして、出版物は3.50リラで、フランス語版やイタリア語で書かれたマニュアルより安いと宣伝している。

ラヴァは、パネーズィ(Panesi)と良い関係を結んでいるので、今週にはトリノで行われる幼児院会議(原文にはAsiliとしか書かれていないが幼児院Asili Giardiniのことと思われる)に参加すると言っている。おそらくパネーズィはトリノの幼児院議会の長か役員なのかもしれない。続けて、レオーネ(Leone)のプロジェクトを読んだが、彼は亡くなったため、会議で幼児院をちゃんと取り扱ってくれる人がいるのかどうか心配だと綴っている。そして、礼儀正しくフレーベル理論をよく知っている内閣長の機嫌を取り、おもねるのが一番いいのではないかとやっている。様子見として、ピックの出版物(ラヴァ自身が喜んで受け取らなかった最近のピックの出版物も併せて、と嫌味っぽく付け加えている)で議論に巻き込んで、彼がどのように返事をしてくるか様子を見てみようと言っている。

ラヴァは、ローマは統一した住所表示がないため、幼児教育の管理が大変であることを言っている。ローマは1871年にイタリア王国の首都になったばかりで、まだ市としての統一がなされていなかったのだろう。また国の行政が集まった首都としての都市整備も十分ではなかったと考えられる。

最後にラヴァは、ピックにユダヤ人幼児院(複数形)について書かれている新聞の購読料として、6

リラ為替をピックに送ると書いている。ここからユダヤ人幼児院の新聞はローマにはなく、ヴェネツィアでは発行していたということがわかる。つまりヴェネツィアはユダヤ人に比較的寛容だったと考えられるだろう。

1885年

この年は、教育省の印のある12月5日付²⁹⁾の手紙1本のみである。前回の手紙から約1年と7か月が経っている。この手紙の左上にはラヴァの筆跡と思われる「保存」(Riservato)とあり、ピックやラヴァにとって重要な手紙に違いない。

「親愛なる友よ」(Amico Carissimo)とあり、手紙の最初に、ラヴァはガベッリ(Gabelli, Aristide 1830-1891)もデ・ログ(De Logu)も病の床に臥せっていると書いている。ガベッリも著名な実証主義教育学者であり、フレーベルの思想を高く評価し、幼稚園教師であるペーターマン(Petermann)やシュワーベ(Schwabe)らとも交流を持っていた³⁰⁾。

ラヴァは続いて、幼児教育や初等教育の改革について正直あまり信じていないと綴っている。なぜなら改革は、野心的な渴望を助長するものだからだと語っている。そして改革というものは、歴史を振り返ると野心的な渴望が見え隠れしていることは否めないだろうと書いている。単純なモチベーションについては、ラヴァはごたごたは容認できず、真の目的に向かって真つすぐに歩んでいくものだと語っている。そしてガベッリは唯一信じられる人物であり、彼を大臣に、あなたと私、そしてペリーレ議員とイタリア半島の人たちが参加する委員会を設立するよう提案をする必要があると言っている。

次の段落では話が急に変わり、幼稚園の園長を探している人はいないかと聞き、幼児院にはあまりXXXXX(判読不明。おそらく「よい園長」)がないのではないかと、そして園長としての良い候補者が一人いるが、ユダヤ人であることを前もって言うておくと綴っている。手紙の宛先であるピックも、そしてラヴァもユダヤ人であるため、この言葉は何を指すのかわからないが、ユダヤ人であるため積極的に推薦しているのか、大っぴらにユダヤ人だと言えない世相があるためなのかは不明である。このユダヤ人の園長は、フレーベル・メソッドをよく心得ており、歌と体育に秀でていること、ピアノも達者

でフランス語も話せると紹介している。その後は下線付きで、「読んだ後は破棄してください」と書いており、ユダヤ系の候補者を勧めること自体がラヴァ自身に不都合となるのか、単に公正性の観点からなのかは想像できない。しかし、手紙の冒頭に「保存」と書かれていることが理解できない。

行は変わり、ピック自身が自ら立てた保育計画をラヴァに送ったようであるが、ピックのユダヤ人幼児院保育計画は幼児教育ではなく初等教育の計画のようなものなので、訂正したものを送ると書かれている。そして我々はまだ最高の状態ではないので、読み書きの基本的な教授は(判読不明な部分が所々にあり)、5歳になった子どもたちであればよいのではないかと読める。そしてピックの意見には懸念があり、いくつか訂正を加えた方がいいとアドバイスしている。さらにラヴァが編集した「言語と記憶のレッスン」(esercizi di lingua e di memoria)には、古い方法である命名法(nomenclatura)のようなシステムティックのようなものではなく、(言語のレッスンは)概念から始まるようにすることを覚えておいてくださいと述べている。アボルティ・メソッドで考案された命名法の時代では、まだイタリア統一もなされておらず人々は様々な地域言語を話していた。特に北イタリアに住んでいた子どもたちはスロベニア語、ドイツ語、フランス語が日常の言語であった。ダンテが使っていた当時のフィレンツェ語をイタリア語として復活させる大プロジェクトが知識人階級の中で行われ、神父であり知識人であるアボルティも、幼児・初等教育でのイタリア語教授は必須のものとしていた³¹⁾。当時の言語教育はモノが描かれた図版を示しながらそれに対応するイタリア語を教える方法が主流だったが、時代はイタリアが統一されて20年以上が経ち、モノと言語を一致させる教え方ではなく、物の概念からイタリア語で教える方法を奨励したのである。イタリア語言語学者デ・マウロ(De Mauro)によると、イタリアの全国民がイタリア語話者となったのはラジオや映画が普及した1950年代頃からと考えられている³²⁾。

おわりに

本論では、公教育省事務官ラヴァが、イタリア最初の幼稚園設立にかかわったピックに宛てた手紙のうち1881年から1885年までを対象とし、ユダヤ人で

あったラヴァが同じくユダヤ人であるピックに対して綴った手紙の内容は、ラヴァがピックに対して競争心を燃やしている複雑な構図が見え隠れする様子が見受けられた。

ラヴァはピックに宛てた手紙で、1872年の初期のころはピックに対して「貴方」(Lei) という尊敬語を使用し、1873年12月からは「あなた」(voi) という少し砕けてはいるが敬語を用いている。voi は古い言葉であるが、目上の人を使用する言葉であり、ラヴァはピックより年下であった可能性が高い。

しかしラヴァは、ピックのユダヤ人幼児院保育計画に対して、この保育計画は「幼児教育」ではなく「初等教育」のようだとし、そこに修正を加えることを要求している。おそらくピックは自らの保育計画で、5歳以下にも読み書きの基本を入れていたようだが、ラヴァは読み書きの基本的な教授は5歳になってからであるという見解を述べ、ラヴァ自身が修正を加えている。そして命名法という古い教授法、つまり子どもに「モノ」を見せてその名前をオウム返しのように繰り返させるのではなく、「モノ」の概念、つまり「モノ」の形や手触り、色、におい、音、味など五感を通して「モノ」を知ることの重要性を訴えていた。この手紙から、ラヴァはすでにピックを超えて幼児教育（幼児の発達にふさわしいレベルや方法論）を知っており、ピックの保育計画にも鋭い意見を述べていた。

ユダヤ人幼児院の改革については少しずつ進んでいたようであるが、1885年時点では、まだアボルティ時代に使われていた名称である「幼児院」のままであった。しかしラヴァは、フレーベル・メソッドにまつわるエピソード記録などをとっており、その意味では少しずつではあるが、保育の内容について改革が進んでいることも明らかになった。また、ユダヤ人幼児院でのピックの『現代教育』の雑誌を定期購読するなど、ユダヤ人幼児院への特別な思いが見受けられた。

ローマでは、イタリア人の子どもたちが通う園は幼稚園になっていったようだが、ユダヤ人幼児院改革が遅れたのは、ユダヤ人を差別的に見るローマ独特の目があったのではないか。1861年にイタリア王国として統一を果たし、首都がトリノそしてフィレンツェと変わり、1971年ようやくローマが首都となったが、そこから10年余たってもローマでのユダヤ人が生きづらかった様子が明らかになった。

注

- 1) 拙稿「イタリアのユダヤ人コミュニティにおける初期幼稚園 —アドルフォ・ピックとヴィットーレ・ラヴァー」 関西学院大学 教育学論究 第12号、2020、p. 11-20.
- 2) アボルティ神父は1791年、マントヴァ公国のジャコバン派弁護士の子として生まれ、父親の勧めで聖職の道に入った。クレモナーの司祭となったアボルティは、ウィーンのテレジア協会に招かれ、ミルデ教授の下で教育学を学んだことから教育学に関心を持つことになった。アボルティは当時ドイツ語に翻訳されていたウィルダースピン (S. Wilderspin 1792-1866) の『幼児の教育とそのシステム』(*Infant Education. The Infant Sistem*) に感銘を受けて幼児院を開設し、アボルティ・メソッドは、イタリア最初の幼児教育メソッドとなった。(拙稿『イタリア幼児教育メソッドの歴史の変遷に関する研究—言語教育を中心に—』 風間書房、2007、p. 44、p. 71.)
- 3) この章は、上記の2020年の拙稿からまとめたものである。
- 4) デ・カストロ (De Castro, Vincenzo 1808-1886) は、パドヴァ大学で美学や古典文学を教えていたが、政治的理由で解雇された。その後は、「イタリアの未来」(*Avvenire d'Italia*)、「良き労働者」(*Buon Operaio*) などを執筆している。
<https://www.treccani.it/enciclopedia/vincenzo-de-castro> (Treccani, it., Enciclopedia on line)
- 5) De Castro, V. *Il Nuovo Aporti*, Natale Battezzati editore, Milano, 1876, in 拙稿、前掲書、風間書房、p. 68-70.
- 6) Ravà: Biella, 20 agosto 1881, Piazza principe Amedeo, in Sezione Manoscritti e Rari, Biblioteca Civica "Vincenzo Joppi" 以下 S.M.R. と示す。
- 7) シチリアーニ (Siciliani, Pietro 1835-1885) は、実証主義哲学者であり教育学者でもあったが、厳格な実証主義者ではなかった。ポローニャ大学で哲学や教育学の教授を務めていた。
<https://www.treccani.it/enciclopedia/pietro-siciliani> (Treccani, it., op. cit.)
- 8) 拙稿、前掲書、2007、p. 87-88.
- 9) Ravà: Roma 24-11-81, in S.M.R.
- 10) Ravà: 6-3-82, in S.M.R.
- 11) デ・ドミニチス (De Dominicis, Saverio 1846-1930) はパヴィア大学の教授であり、「教育学年報」(*l'Annata pedagogica*) や「教育学雑誌」を指揮し、実証主義教育学の代表者であった。
<https://www.treccani.it/enciclopedia/de-dominicis-saverio-faustino> (Treccani, it., op. cit.)
- 12) 『現代教育』(*Educazione Moderna*) は、ピックがフレーベル教育について編集し出版している代表作である。
- 13) Ravà: Roma 18-3-82, in S.M.R.
- 14) Ravà: Roma 20-3-82, in S.M.R.
- 15) グイド・バッチェッリ (Baccelli, Guido 1830-1916) は医師であり、また政治家でもあった。彼の医師としての業績はマラリア感染に関する研究など、イタリアの医学界に多くの貢献を残している。そして公教育大臣としては1881年～1884年、1893年～1896年、

- 1898年～1900年と数回動めたが、学校教育の改革はうまく行かなかった。
- <https://www.treccani.it/enciclopedia/guido-baccelli> (Treccani, it., op. cit.)
- 16) Ravà: Roma 月日不明-82, in S.M.R.
- 17) Ravà: Roma 8-4-82, in S.M.R.
- 18) Ravà: Roma 11-5-82, in S.M.R.
- 19) ベルトラミは、苗字しか書かれていないため定かではないが、ベルトラミ・エウジェニオ (Beltrami, Eugenio) ではないかと思われる。彼は当時イタリアでは著名な数学者であり、ボローニャやピサ、ローマのほか、バヴィアでも教鞭をとっているため、この人物である可能性は高い。
- <https://www.treccani.it/enciclopedia/eugenio-beltrami> (Treccani, it., op. cit.)
- 20) 拙稿「ヴェネツィアのユダヤ人コミュニティにおける幼稚園導入—エーレナ・ラファロヴィチ・コンパレッティを通して—」関西学院大学 教育学論究 第9号-2, 2017, p.77-87. 「ヴェネツィアのユダヤ人コミュニティにおける初期幼稚園—公立幼稚園の設立—」関西学院大学 教育学論究 第10号, 2018, p.25-38. 参照。
- 21) Ravà: Roma 21-12-82, in S. M. R.
- 22) Ravà: 12-9-83, in S. M. R.
- 23) Ravà: Venezia li 4 Ottobre 1883, in S. M. R.
- 24) Ravà: Roma 13/2/84, in S. M. R.
- 25) 『オピニオン』(Opinione) は、当時ローマで発行されていた日刊新聞である。
- 26) Orlando, D. "L'ambiente socio-culturale e l'esperienza agazziano", La Scuola, Brescia, 1976(1967), p. 29. nota.
- 27) 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期に関する研究—コロミアッティ位置づけの試み—」関西学院大学 教育学論究 第5号, 2013, p. 55-64. 「1870年代前半ヴェローナの幼稚園—『イタリア教授同盟』会報の分析を通して—」関西学院大学 教育学論究 第8号, 2016, p. 51-63. 「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相—コロミアッティの『教育システム』を中心に—」日本ベスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第28号, 2016, p. 23-47. 参照。
- 28) Ravà: Roma 25/4/84, in S.M.R.
- 29) Ravà: Roma 5/12/85, in S.M.R.
- 30) 拙稿、前掲書、風間書房, 2007, p. 87-92. Gabelli, A. *Sulla corrispondenza dell'educazione alla civiltà moderna*, 1866, in Gabelli, A. *L'Educazione Nazionale*, Vallecchi, Firenze, 1923, p. 12. Gabelli, A. *Il metodo e gli asili Froebel*, <Il Risveglio Educativo>, dicembre, 1890, in Gabelli, A. *L'istruzione e l'educazione in Italia*, La Nuova Italia, Firenze, 1871, p. 301-302. ecc.
- 31) 拙稿、前掲書, p. 47-70.
- 32) De Mauro, T., *Storia linguistica dell'Italia unita*, Editori Laterza, 2002, p. 118-172.

使用した手稿

- ・ Ravà: Biella, 20 agosto 1881, Piazza principe Amedeo, in Sezione Manoscritti e Rari, Biblioteca Civica "Vincenzo Joppi" 以下 S.M.R. と示す。
- ・ Ravà: Roma 24-11-81, in S.M.R.
- ・ Ravà: 6-3-82, in S.M.R.

- ・ Ravà: Roma 18-3-82, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 20-3-82, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 月日不明-82, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 8-4-82, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 11-5-82, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 21-12-82, in S.M.R.
- ・ Ravà: 12-9-83, in S.M.R.
- ・ Ravà: Venezia li 4 Ottobre 1883, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 13/2/84, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma 25/4/84, in S.M.R.
- ・ Ravà: Roma, 5/12/85, in S.M.R.

参考文献

- ・ De Castro, V. *Il Nuovo Aporti*, Natale Battezzati editore, Milano, 1876.
- ・ Gabelli, A. *Il metodo e gli asili Froebel*, <Il Risveglio Educativo>, dicembre, 1890, in Gabelli, A. *L'istruzione e l'educazione in Italia*, La Nuova Italia, Firenze, 1871.
- ・ Gabelli, A. *Sulla corrispondenza dell'educazione alla civiltà moderna*, 1866, in Gabelli, A. *L'Educazione Nazionale*, Vallecchi, Firenze, 1923.
- ・ Orlando, D. "L'ambiente socio-culturale e l'esperienza agazziano", La Scuola, Brescia, 1976 (1967), p. 29. nota.
- ・ 拙稿『イタリア幼児教育メソッドの歴史の変遷に関する研究—言語教育を中心に—』風間書房, 2007.
- ・ 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期に関する研究—コロミアッティ位置づけの試み—」関西学院大学 教育学論究 第5号, 2013, p. 55-64.
- ・ 拙稿「1870年代前半ヴェローナの幼稚園—『イタリア教授同盟』会報の分析を通して—」関西学院大学 教育学論究 第8号, 2016, p. 51-63.
- ・ 拙稿「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相—コロミアッティの『教育システム』を中心に—」日本ベスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第28号, 2016, p. 23-47. 参照.
- ・ 拙稿「ヴェネツィアのユダヤ人コミュニティにおける幼稚園導入—エーレナ・ラファロヴィチ・コンパレッティを通して—」関西学院大学 教育学論究 第9号-2, 2017, p. 77-87.
- ・ 拙稿「ヴェネツィアのユダヤ人コミュニティにおける初期幼稚園—公立幼稚園の設立—」関西学院大学 教育学論究 第10号, 2018, p. 25-38.
- ・ 拙稿「イタリアのユダヤ人コミュニティにおける初期幼稚園—アドルフォ・ピックとヴィットーレ・ラヴァー—」関西学院大学 教育学論究 第12号, 2020, p. 11-20.
- ・ <https://www.treccani.it/enciclopedia/pietro-siciliani>
- ・ <https://www.treccani.it/enciclopedia/de-dominicis-saverio-faustino>
- ・ <https://www.treccani.it/enciclopedia/guido-baccelli>
- ・ <https://www.treccani.it/enciclopedia/eugenio-beltrami>
- ・ <https://www.treccani.it/enciclopedia/vincenzo-de-castro> (Treccani, it., Enciclopedia on line)

Grazie moltissimo ad Alessandra, la bibliotecaria della Sezione Manoscritti e Rari, in Biblioteca Civica "Vincenzo Joppi" Udine.

本研究は、JSPS 科研費21K02371の助成を受けたものである。